

## 前回までのあらすじ

流遠るしおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。

学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は「カタストロ」と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための

存在——「機獣少女」きじゆうだった。

クラウの凶刃に倒れ、やみひめは黒い結晶体クリスタルへと姿を変えた。

ツバキはやみひめに代わり「機獣少女」へと変身する。クラウを殺さないように戦つた  
め、試験用に組み込まれた「プラストー・システム」を使い、一度はツバキが優位に立つ  
が、追い詰められたクラウには起死回生の手段があつた——荷電粒子砲である。

試作品であるMBジャケットに組み込まれていた『対荷電粒子シールド』によって、荷  
電粒子砲の照射には耐えたツバキだったが、即座に放たれた第一射に死を覚悟した。

だが、荷電粒子砲の直撃からツバキを護まもる者がいた。

そう——やみひめが帰ってきたのだ。

## 登場人物

### ◆流遠るしおやみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

### ◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂たかちほツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

### ◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるMBデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

### ◆橘たちばなアサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

### ◆クラウド・P・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れた大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

### ◆神譲かみじょうハン

やみひめとクラウドのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウドとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL REUNION**

夜の闇と静寂を掻き乱す、狂暴な音と光の乱舞。

たちばな  
橘

アサトは、目の前のその光景に、ただ呆然と立ち尽くす事しか出来ない。こんな所にいるべきではないと本能が危険信号を発してはいるが、此処より安全な場所などない。

いざとなれば、すぐ傍らにある、逆さ吊りにすれば成人男性でも、磔はりつけに出来るようなサイズの、逆十字の黒い結晶体クリスタルが自分を護まもってくれる。

だがそれ以前に、目の前で戦っている少女を置いて逃げていいはずがない。それが自分の使命で、自分しか戦える存在がいらないからと、万全ではない状態にも関わらず戦ってくれている少女を置いて……。

やがて、すさまじい音と光が消えていくと、アサトの前方に件くだんの少女の後ろ姿が見えた。彼女が盾になってくれたから、アサトは光の直撃に遭あわずに済んだのだ。

少女の名前はツバキ。『高千穂ツバキ』と名乗っているが、彼女は別の星からやって来た異邦人である。〈機獣少女〉と呼ばれる存在で、〈カタストロ〉という怪物を倒す事を使命としているらしい。だが、ツバキは地球の環境下では充分に実力を発揮出来ないため、これまでアサトもよく知る別の少女に代行を任せていた。今はなんとか戦えているようだが。

「……………」

アサトは思わず歯噛みする。年端もいかぬ、まだ小学生の少女が、自分を護って戦っているのだ。距離はあっても、その背中がゆっくりと上下しているのを見れば、相当な疲労が蓄積しているであろう事は嫌でも判ってしまう。身に纏まとった弓道着のような戦装束いくさしやうぞくがあちこちで開き、その周囲の空気が揺らめいて見えるのは、恐らく冷却機構ラジエーターか何かが生かしているのだろう。

あの光が何なのかは判らない。だが、ともに受ければ、並の人間が無事でいられるはずがない。そういう類たぐいのものである事くらいは理解出来る。

その光を放ったのは、ツバキよりも更に前方にいる、アサトと同一年くらいの少女だった。名前はクラウ。アサトも一度だけ顔を合わせた事がある。今の彼女は〈カタストロ〉に意識を奪われており、〈機獣少女〉であるツバキを敵と認識して攻撃しているらしい。黒いドレスのような衣装は、ツバキのものと同様にあちこちが開いており、冷却作業中であろう事が窺うかがえる。

アサトはおおまかな事しか聞いていないため——ツバキの説明にも推測が混じる部分が多々ある——状況を完全に理解しているとは言い難い。だが、クラウに取り憑いた〈カタストロ〉にはなんらかの目的があり、それを果たすために現れた。そして、その障害となるものを排除すべく行動しているのは判る。問題なのは、その排除対象が今はツバキであ

る事だ。

見れば、クラウドもだいぶ消耗しているらしく、肩で息をしているように見える。ツバキ同様、限界が近いのだろう。

にも関わらず――

「嘘だろ……」

口にすれば嘘になってくれるかもしれない――そんな気持ちでアサトは独りごちたのだが、目の前の現実が変わらない。

クラウドが、あの光の第二射を撃つ体勢に入ったのだ。

あんなもの続けざまに撃って、クラウドの身体がもつのか？　そして、もし撃たれれば、ツバキは……。

アサトの思考を読んだようなタイミングで、ツバキがこちらを振り返る。その表情は、親とはぐれた迷子のそれだった。

『橘たちほなさん、私、どうするべきでしょうか……？』

そう問われている気がした。

「もういい！　逃げろ！」

アサトは堪たらず叫ぶが、即座に自分の言葉に後悔した。距離があるため聞こえてはいないはずだが、表情と唇の動きから、彼が何と言ったか察したのだろう。ツバキは見慣れた澄まし顔に微笑を浮かべ、前向き直った。

ツバキというのはそういう少女だ。

『もういいんだ』

『逃げていいんだ』

そんな言葉で納得する事が出来ない。

それを『もつとがんばらないといけないんだ』と、自分の中で変換してしまう。

アサトにはなんとなく判ってしまった。

ツバキは死に場所を探しているんじゃないか――と。

「ツバキ！　おい、ツバキ……っ!？」

アサトはツバキの背に向けて叫ぶが、その声は彼女に届かない。更に前方では、今にもクラウドが光の第二射を撃つのではないかという段階に見えた。

「……………」

アサトは傍かたわらの結晶体クリスタルに向き直り、祈るように額を押し付けた。

「……おい、何やってんだ……このままじゃ、ツバキがクラウド、もしかしたら二人とも死ぬぞ……何やってんだよ、お前……お前の友達だろ……助けに来たんだろ……なあ、おい……」

自分が情けなくて死にたくなる。この期に及んで他力本願な自分に嫌気が差す。だが、アサトはただの高校生だ。戦う力を持った少女達の領域に踏み込む事は、死を意味する。そうなつては、ここまで戦ってくれたツバキの努力が無駄になる。

だからといって、ツバキを見捨てていい理由にはならない。彼女の姿が、かつて行方不明になった妹と重なる。

「あんな思いはもうご免なんだよ……」

だから――

「――やみ子……!」

喉のどの奥から絞り出すように、アサトが名前を呼ぶ。

それは、かつて彼が助けた少女の名前だ。

アサトが此処こゝにいる元凶で。

でもそれは、ツバキを手伝うため、クラウドを救うための選択の結果で。

だからアサトも一緒に来てしまったのだから、自業自得で。

油断して友達クラウに刺され、結晶体クリスタルになってしまった粗忽そこつ者で。

それでも、アサトにとっては大切な――

「!……!?!」

ふとアサトが異変に気付いた。

結晶体クリスタルが闇に包まれている。

闇は結晶体内部から湧き出ているようで、アサトは闇に押されるかたちで数歩あと後ずさる。

やがて闇は結晶体全体を覆い隠し、次の瞬間には霧散していた。

其処そこに結晶体はなく、代わりにいたのは黒い和服に身を包み、狼のような耳と尻尾を備えた、ツバキと年代代くらいの少女だった。

眠りから目覚めるように開いた瞳は、少し吊り目つがちな琥珀アンバーのような橙だいだい色。ポニーテールにした長い黒髪を揺らし、アサトを認めると、挨拶あいさつもなしに少女は駆け出した。

「……一言くらい何かあるだろ、まったく」

文句を言うような口ぶりだが、アサトの顔は安堵していた。それは彼の表情を見慣れている者でなければ気付かないような、わずかな変化だったが。

しかし、それも当然だろう。交わす言葉こそなかったが、こちらを認めた瞬間に見せた少女の笑顔で充分だ。目尻めじりに薄うすつすらと光るものが見えた。それだけで彼女の万感の想い

が伝わってきた。だから、それで充分だ。

「がんばれよ……やみ子」

アサトは駆け出していく少女の背中に小さく声援を送った。

少女の名前は流遠るよおやみひめ。

小学六年生で、今は「機獣少女」の——普通の女の子だ。

第十六話

『機獸少女、新生！』



とても静かで、だけど一人で過ごすには広すぎる和室。

クラウに刺された私は、此処——仮想空間で〈カグツチ〉と再会した。

其処で私は知った——〈カグツチ〉の失われていた過去と、私達が並行世界の同一人物である事を。

〈カグツチ〉は私の中に融けて、もういない。

だけど——ううん、だからこそ、私は〈カグツチ〉の分まで幸せにならないといけない。

それが、もう一人の自分との約束。

そんなのは私の自己満足だって判ってるけど、それでも——

「……？」

何か違和感がある。なんだろう？ 胸の奥が熱い……。

そうか、判った。身体からだの再構築が終わったんだ。

〈カグツチ〉が——もう一人の私が教えてくれる。

私はもう識しっている。

自分の能力ちからの使い方。

「——帰らなきゃ」

そうだ。

私を待っていてくれる人達がいるんだから。

瞳を閉じて、イメージする。

それは帰るための道標みちしるべ。

「……見つけた」

私を呼んでくれる——声。

それが帰り道。



生まれ変わったみたいな不思議な感覚と共に、私は両足を大地に踏みしめる感触を覚えた。ふう、と息を吐き、ゆっくりと瞳を開く。

其処そこにいたのは、私の大好きな人——橘アサト。たちほな

高校三年生の年上の男の子。いつも気怠けだるげで、面倒くさそうで、どうしてこんな人の事を好きなのか、自分でも時々判らなくなる。

だけど、そんなのは当たり前。

どれだけ世界が変わっても、どれだけお互いの姿が違っても、私達は惹かれ合う。

それは多分——運命。

言葉にしようとするけど、安っぽいけど、そういう事なんだと思う。

そうだよ、アサト。

「……………」

アサトは私を見つめるだけで何も言わない。

きっと言えないんだと思う。

だって、少しでも言葉を発してしまったら、アサトは泣いちゃうから。

だから何も言わない。言えない。

男の子は格好付けたがりだって、お母さんが言っていた。こういう時は女の子が大人になって、男の子を立ててあげないと。

何より、そんなに私を心配してくれていた事が嬉しいから。

私はただ、にっこり笑って、何も言わずに駆け出した。

アサトの目尻に薄っすらと光るものが見えたけど、そこは言わないであげよう。

今は先にやらなくちゃいけない事がある。

状況は最悪の一手手前。

だけど——手遅れじゃない。

ツバキとクラウが距離を置いて向かい合ってる。クラウは攻撃態勢で、ツバキはそれを防ごうとしている。きっと、クラウの攻撃から後ろにいるアサトを護ろうとしてるんだ。ツバキはかなり消耗してる。多分、クラウの攻撃を防ぎきれない。本当なら逃げるべきなんだと思う。でも、ツバキはそれをしない。そういう子だ。

だから私が護らないと。後ろにいるアサトの事も。

「——〈護るもの〉！」

私の言葉と同時に、クラウが攻撃を開始した。まるで怪獣みたいに、口から光線を吐いているように見えるけど、多分違う。筒状の力場を顔の前に展開して、クラウが変換したエネルギーを集束・加速させる『砲身』<sup>バレル</sup>にしてるんだけど、視認しづらいからそう見えるだけなんだと思う。

クラウの攻撃——あれは荷電粒子砲だ。

惑星ゼヘナに機獣が兵器として存在した時代の最強兵器。

だけど、私の〈護るもの〉<sup>ディフレイド</sup>は破れない。クラウが撃った荷電粒子の奔流<sup>ほんりゅう</sup>は、ツバキの前方に展開した〈護るもの〉<sup>ディフレイド</sup>によって拡散・消失していく。

これが〈カグツチ〉からもらった能力の一端。彼女が自分を『特殊な機獣』だと言った理由。

〈E. I. リアクター〉。

理不尽に抗い、不条理を駆逐し、世界の理を書き換えるための力。それがどういふ事なのかは判らない。けど、使い方は識っている。

だってこれは——私の能力だから。

来るであろう衝撃が来ず、勝手に荷電粒子が無力化されていく光景に、ツバキは多分、きよとんとしていると思う。

「——ツバキ」

私は、状況に戸惑っているだろうツバキの背中に声をかけた。

「ただいま、ツバキ」

こちらを振り返ったツバキに、私は帰還の言葉を告げる。

「——がんばったね」

私がない間、ツバキがどんな風にクラウと戦ったかは知らないけど、見なくても判る。きつと、すごくがんばった。一生懸命にやったんだと思う。

がんばった子には、『がんばったね』って言ってあげないと。

「やみひめさん……うっ……ひっく……っ」

普段は澄まし顔で、私より一つ年下なのに大人びてて、達観した雰囲気をしているツバキが、蒼玉のように青く澄んだ瞳から大粒の涙を流して、泣きじゃくっている。

ツバキだって、まだ子供なんだよね。

「ごめんね、遅くなって」

私はツバキの身体を抱いて、両腕にぎゅっと力を込めた。気持ちも落ち着けるように、震える背中を優しく擦る。こんな小さな身体で、ずっと〈機獣少女〉として〈カタストロ〉と戦ってきたんだよね。ツバキがどんな環境で暮らしてきたのかは知らないけど、きつと私なんかより大変な毎日を送ってたんだと思う。それが突然、地球に跳ばされて、それでも使命を投げ出さない。

ねえ、ツバキ。

余計なお世話かもしれないけど、私はツバキに幸せになってほしいよ。

「……やみひめさん」

「うん、何？」

「どうして腋腹からすくい上げるように、指をさわさわさせるんです？」

「ツバキの胸は本当に大きいなと思って、堪能してるから？」

私の返答を聞くと、ツバキは後ろに下がって距離を取った。そして、自分の胸元を隠すようにして、ジトツとした目を私に向けてくる。

うん、いつものツバキだ。

もちろん、今のセクハラはツバキにいつもの調子に戻ってほしくてやっただけで、悪意なんてない。微塵も。これっぽっちも。

「あれ？ ツバキ、MBジャケットが変わってる？ 〈カグツチ〉も形が違っし」

ツバキのMBジャケットは、私と色違いのミニスカ和服だったはず。なのに、今はミニスカが丈の長い袴はかまみたいになっていて、弓道着みたいなデザインになっている。〈カグツチ〉も私が使っていた時みたいな長剣でも、ツバキが使っていた時みたいな雑刀なぎなたでもない、弓みたいな形状をしている。

「ていうか、機力は？ MBコアは治ったの？」

地球の大气が合わなくてMBコアが不調で、〈機獣少女〉が戦うのに必要な機力が生み出せないから、私が代行するって言い出したのが始まりだったのに。

「訊きたい事があるのはお互い様です。けど、すべて終わってからにしましょう」

私の疑問に、ツバキが苦笑気味に答えた。ツバキだって、私が元の姿に戻っている事や、私のMBジャケットが変わっている事、何より〈カグツチ〉の事など、訊きたい事はたくさんあるはずだ。でもツバキの言う通り、まずはやらなきゃいけない事がある。

「——でも、これだけは言わせてください」

私が気持ちを切り替えていると、ツバキが穏やかな口調になって言った。

「うん？」

「おかえりなさい、やみひめさん」

それが、さつき私がツバキに向けて言った『ただいま』に対する返事だと気付くのに、ちよつとだけ時間がかかってしまった。

きょんととしてしまった私の表情が可笑おかしかったのか、ツバキがくすりと笑った。なんだか悔しいけど、悪い気はしなかったから、私もつられて笑った。

「——そうだ。ツバキ、〈カグツチ〉を貸して」

「え？ あ、はい」

何をするのかと不思議そうな顔をしながら、ツバキが〈カグツチ〉を私に渡してくれた。見慣れない弓状の〈カグツチ〉を受け取り、私は少しだけ躊躇ちゆうちよしたけど、やっぱりやる事にした。

「——〈再起動〉」

私はそう言い、自分の能力ちからを使った。

『……………ん。久しいな、やみひめ』

「うん。おはよう、〈カグツチ〉」

まるで目を覚ましたように、〈カグツチ〉が古風な口調の機械音声マシン・ヴォイスを発した。私はそれに、ほんの少しだけ複雑な気持ちで答えた。

「!? か、〈カグツチ〉……………!?」

『ん？ どうしたのだ、ツバキ。素っ頓狂すんきやうな声を上げおって』

「だって、今までずっと……………」

『ふむ。まあ、色々あったのだ。そうであろう、やみひめよ』

〈カグツチ〉の言葉に、私は苦笑を返す。

この〈カグツチ〉は、本来の——『もう一人の私』じゃない。あの〈カグツチ〉の意識は私の中に融とけて、もういない。

この〈カグツチ〉は、過去を取り戻す以前の、ツバキのパートナーであるMBデバイスだった頃をベースに再起動した人格。元々そうだったけど、過去の記憶に執着はない、思いつきもない——そういう風に設定してある。

こんな事をしなくてもMBデバイスとしての機能に問題はない。だけど、ツバキにはパートナーとしての〈カグツチ〉が必要だと思った。私の行為は自己満足の偽善で、ひどく残酷な事かもしれない。

それでも——

『——やみひめよ』

私の葛藤に気付いたように、〈カグツチ〉が私を呼んだ。

「……………うん」

『其方そなたの行為は間違っておらぬ。誰でもない私が言うのだ。胸を張るがよい』

「〈カグツチ〉……………」

『うむ』

きっと〈カグツチ〉は気付いてるんだ。今の自分が以前と違って、だけどそれには意味があるんだって。

「うん……………ありがとう！」

『それでよい』

「あの、何の話ですか……………?」

通じ合っているみたいなお私と〈カグツチ〉の、第三者には判らない会話に、ツバキだけがきょとんとしていた。

ひょっとしたら、この〈カグツチ〉がすべてを思い出す時は来るのかもしれない。そう

いう風には設定していないけど、MBコアにそんな理屈は通用しないかもしれないし、(カグツチ)は普通の機獣じゃないから。

だけど、そんな時が来ても大丈夫だと思えた。

この(カグツチ)なら、すべてを受け止められる。

それに、最高のパートナーと一緒にいてくれるんだから。

『ふむ、攻撃が止んだな』

寝起きであつても、そこはMBデバイス。(カグツチ)は私達と話しながら、ちゃんと状況の把握もしていたみたい。私の展開した(ディフレイド)は、外側の音もある程度遮断するから気にならなかつたけど、ようやく荷電粒子砲の照射が終わった。綺麗とも言える光の乱舞がなくなり、また周囲は夜の闇と静寂を取り戻す。

そして、私達の目の前にはくらうがいる。

かなり消耗してる。表情はないけど、肩で息をしているし、立っているのがやつとな様子に見える。

「ツバキ、手伝って」

「クラウさんを救う方法があるんですね」

ツバキの言葉に、私は頷く。それだけで納得してくれたのか、ツバキも頷き返してくれた。

信じてもらえてるっていうのは、すごく嬉しい。

「——(ヤタガラス)」

私が呼ぶと、右掌てのひらに黒い霧のような闇が現れ、それが霧散すると、黒い勾玉まがたまが残されていた。それは(カグツチ)の待機モードに似ているけど、内側から仄ほのかに赤い光を發している。

もう一人の私——ヤミヒメの欠片かけら。

「やるよ」

『Standing by ——』

私の呼び掛けに、それは低い男声を思わせる機械マシン・ヴォイス音声を發し、一際強く発光する。眩しい赤い輝きに包まれると、それは次の瞬間には勾玉から剣に姿を変えた。

『complete』

形状変化を終えた事を告げる機械マシン・ヴォイス音声。でもこれは(カグツチ)のような意志じやなくて、ただのシステム音声。人格みたいなものはない。

「それ、MBデバイスなんですか？」

私の手に収まった剣を見て、ツバキが訊ねた。

「うん。正確にはちょっと違うんだけど」  
私の濁した言い方に、説明しにくい事情があるんだと察してくれたのか、ツバキは言及しないしてくれた。

これは〈ヤタガラス〉。  
形状は剣だけど、正確を期すなら『機械的で幅広な刃』だと思う。日本刀みたいな反りはなく、『板』を思わせる黒い刀身は実用性重視で、頑丈で斬るための道具なんだと自己主張しているように見える。だけど無骨って感じじゃなくて、一部に赤いアクセントが加えられているせいか、不思議とスタイリッシュに感じる。私は武器とかに詳しくないけど、きつとこういうのを機能美と造形美の両立っていうんだと思う。

持ち手のすぐ上——峰みねの方に二本の出っ張りがあって、多分これが名前の由来。

日本神話に登場する二本足の鳥——それが『八咫鳥』。

私がツバキに濁した言い方をしたのは、MBデバイスじゃないなら何かを説明出来ないから。この服だってMBジャケットじゃない。理論的には同じだけど、同じじゃない。『火を起こす』っていう結果は同じでも、ライターと火炎放射機じゃ、仕組みや起こせる火の規模がまるで違う——っていう例えでいいのかな？

でもこの服布——もちろん違うけど——の面積や量は増えるのに、妙にはだけてて、結果的に前のミニスカ和服のMBジャケットより露出が増えている気がして……恥ずかしい。なぜか私の能力ちからでもデザインが変えられないし。そもそも、なんで和服？

「……………」

とにかく、今の私は〈機獣少女〉に近い、でも別の存在。

それでも——やるべき事は変わらない。

私の中にはヤミヒメがいる。

ツバキも一緒に戦ってくれる。

だったら、出来ない事なんてあるはずない。

「——絶対に助けるからね、くらう」

私は〈ヤタガラス〉を握る右手に、ぎゅっと力を込めた。

## あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL REUNION』第十六話をお届け致します。

第十五話が一月末なので、本編は三ヶ月弱ぶりです。読者の方が、ちゃんと内容を覚えてくださっているのか不安な今日この頃です……。

今回から『XXXXXXXX』が『REUNION』と表記されていますが、この本文中のみなので、特に変更はありません。

内容に関して言うと、〈ヤタガラス〉はもちろん、紙白さんきんせい謹製のアレです。『追加兵装』のヤミヒメ式型のページに画像があるので、ご覧いただけるとイメージしやすいかと思いますが。起動の際の機械音声は『仮面ライダー555』のファイズフォンが元ネタです。第三話で観ているDVDも実は『555』で、やみ子は『555』推しという裏設定にしています。

それでは謝辞を。

ここまでに読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

終わりそうで終わリません。これは終わらせたくないという、作者の無意識的行動の結果なのか……まあ、単に心理描写なんかが多いせいなんです。構成や展開を考えた結果でもあります。まあ、ストーリーよりキャラを書きたいので。

今しばらく、僕の趣味にお付き合ってください。

2016/4/9 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る